

## <書評論文>

# 中国都市における農村出身女性

Tamara Jacka,  
*Rural Women in Urban China:  
 Gender, Migration, and Social Change.*  
 (M. E. Sharpe, 2006)

穆 亜 萍

## はじめに

「流動人口」は2010年の中国を読むキーワードの一つとして、20世紀1990年代末からメディア、行政関係者や国内外の研究者の注目を集めている（高橋ほか 2004）。「流動人口」とは、戸籍地から離れて別の住居地に移り住んでいる人口、或いはそういう人のことである。従来中国は、戸籍制度が厳格に施行され、原則的に戸籍地と住居地は同一であったが、1970年代末の改革開放を経て、食糧事情が好転し、市場経済となって移動が比較的自由になったために、数多くの農村出身者が都市へ移動し、住居地と戸籍地との分離が広範に生じた。

今まで、こういった現象について、人口や経済動向の視角からマクロにとらえた研究もあり（黄晨熹 1995; 王洪春ほか 2004）、居住問題や治安、労働などの具体的課題をとりあげたものもある（Bakken, 2000; 余 2004; 蔡・白 2006）。これらの研究を全体的にみれば、都市における農村出身者をどのように「管理」するかという視点に沿って、農村出身者を短期滞在者であれ定住者であれ「流動人口」という集合的概念ののなかに把握するものが多い。これらの先行研究や報道と違って、現実の農村出身者、特に女性の行為主体性（agency）に目を向けて、農村出身女性の個々の経験というミクロかつ質的なデータを用いながら農村－都市間の人口移動を読み解こうとする一人の研究者がいる。それが Tamara Jacka である。

Tamara Jacka はオーストラリア国立大学太平洋アジア研究大学院・ジェンダー関係セ

ンター (Gender Relations Center) の上席研究員である。1980年代末から北京や杭州の農村出身者コミュニティ、四川省や山東省の農村においてフィールドワークを重ねてきて、中国の農村女性とその移動をめぐるジェンダー分析にもっとも早い時期から取り組んできた研究者の一人だといえる。その成果として、本書のほか、1994年にアデレード大学に提出した博士論文をもとに1997年にケンブリッジ大学により出版された *Women's Work in Rural China: Change and Continuity in an Era of Reform* や2004年にコロンビア大学により出版された Arianne M. Gaetano との共同編集による論文集 *On the Move: Women in Rural-to-Urban Migration in Contemporary China* などが挙げられる。

本書では、作者は北京における女性移住労働者の自助支援組織「打工妹之家」<sup>(1)</sup> 及び北京市海淀区の農村出身者コミュニティにおける聞きとり、参与観察、アンケートの結果、更に雑誌「農家女」や「打工妹」の記事や農村出身者の手記など豊富な一次資料に基づいて、従来常に自明視されてきた農村－都市という二項的区分や農村出身者女性の集団考察傾向を脱構築し、女性男性間の資源配置や役割というジェンダー秩序の再編成、それと深くかかわっている社会政策や制度、言説について検討している。以下においては、第1節で本書の構成を簡単に紹介し、その上で第2節において著者の幾つかの論点をピックアップし論じていく。

## 1 構成

本書は序論と四つの部分という構成をとっている。

「周縁」から「中心」へという序論では、本書の分析対象、分析目的、および方法論や全体を貫く理論枠組を概観している。著者は従来のフェミニズムの言語構造、宗教秩序、主体形成に根強く潜む男根中心主義や性差二元論を解体し脱構築しようとするポストモダン・フェミニズム理論という文脈において現代中国のジェンダー関係を考え、農村という「周縁」から都市という「中心」に移動した農村出身女性を自身の研究の中心にすると述べている。人類学者である著者は農村出身女性の主体とその経験、主体位置を生成する言説や社会関係の相互構築性を明らかにすることで、「周縁」と「中心」の関係を従来の二元的構造としてではなく、再編成されるものとして見直すことができるのではないかという視座から出発し、本書の議論を展開していく。

「主体」と題された第1部分は農村出身者の主体位置の言説構成についての検討から始

<sup>(1)</sup> 1996年北京で作られたNPOであり、名前は農村出身者女性の家の意味。

まり、2章からなっている。第1章は中国における「モダニティ」概念から農村－都市関係の系譜を辿りながら、農村出身者の主体位置の源と歴史を19世紀の晩期まで遡って、問題の背景を現代まで描写している。それから、現代都市の支配的言説、特にメディアが農村出身者たちについてどのように描き、どのように彼らの主体位置を構成してきたかについて考察している。第2章では1990年代後半から出現した非政府組織や新しいメディアの活動に目を向ける。具体的に言えば、「打工妹之家」という機構や「農家女」、「打工妹」などの雑誌は農村出身者女性の主体位置の形成にどう貢献しているのかについて検討している。

以上の第1部分を「理論編」とするならば、続く第2、3、4部分は農村出身女性の個人経験及び彼女たちの心の声に焦点をあて、さながら「経験編」と位置づけられるであろう。

まず第2部分では、著者はこれらの移動女性の地理的また社会的な「場」の経験に注目している。具体的に言うと、第3章は都市における農村出身女性たちが受けている制約と周縁化について考察し、その制度的背景とケーススタディーを示す。戸籍制度および他の関連している規制は各種のいじめや搾取、さまざまな不公平をもたらすために、農村出身女性は「場（地理的、社会的な都市部）に入っている」と感じると同時に、「疎外されている」と深く味わっている。第4章は主に農村出身女性があるさとと北京市という異なった場に対する評価を考察し、第1章でとりあげた都市における発展とモダニティの言説を農村女性たちがどのように受け入れているかを分析している。

「人々」という本書の第3部分は人間関係とアイデンティティの経験について考察している。第5章は、農村出身女性の他人との関係を検討して、先行研究でしばしばとりあげられる「孝行娘」／「反抗的な娘」モデルや夫に付随する移住者として女性をとらえる従来の開発経済学モデルを批判的に参照しながら、家庭関係が移動の動機と決定に与える影響や、移動そのものの家庭関係への影響、及び農村出身者間のネットワークが移動経験に対してもつ重要な意義などについて、自身の発見と考察を提出する。第6章は、農村出身女性にとってだれが「私たち」であり、だれが「彼ら」であるのかという分類は何に依拠しており、何を基としているかというアイデンティティ経験についての分析である。彼女たちは<「田舎者」、「都会者」の線引きを自ら再生産し、常に前者に自らを位置づける>、<後者に憧れてはいるが、必ずしも完璧な理想型とは思っていない>と著者は示す。

最後の第4部分「時間」、すなわち終章である第7章は農村出身女性の語りの類型を考察し、これらの語りから彼女たちの移動経験についての時間的認識、彼女たちの能動性と反抗力の関係を理解しようとしている。ここで、主に二つの語り類型に分けられる。一つ

は、語り手は自分のライフコースの視点から移動や都市生活を見るという語りであり、例えば「幕間としての移動」、「逃避としての移動」、「運命を変える移動」などの言い方である。もう一つは、語り手は彼女たちの都市における状況や身分地位、及び他人から受けた冷たい眼差しや不公平などの不満や文句をいうという語りである。その中の代表的類型は生活の辛さのアピールと近年萌芽してきている人権問題の訴えである。これらの語りは、支配的言説の純粋なコピーでもないし、それと分断できるものでもない。本章の最後に、著者は拡大している目覚めた農村出身者の人権意識に向けて語りかける。人権問題の影響はすでに政府の指針まで影響を与えていることを示し、この影響で、利益の搾取となる等級制度や不平等の維持を前提にしているグローバル資本主義的な社会経済秩序が変化していくかもしれないと遠望的に示唆し、本書を締めくくっている。

## 2 論点

以下で著者以前の先行研究ではあまりみられないという主要な論点をいくつか紹介し、レビューしながら論じてみよう。

### 2-1 普遍的抑圧とその隠蔽——主体位置構築の難しさ

本書では、著者は国家の発展がモダニティに帰結するという19世紀以降のエリート近代主義の思考が今日の中国の農村－都市関係に連続的につながっていると指摘している。グローバル経済による廉価労働力の市場需要や家父長制への反抗などのために、農民が都市へなだれ込んでいる。しかし、市場指向型の改革のなかで、主導的啓蒙思想を持っているエリートたちは農村が抱える低開発の要因を農民自身の質の低さに求めて、農民の「他者化」が進んでいる。また、厳しい戸籍制度と貧富の差があって、彼らは下等市民として扱われていることは明らかなことであり、主体位置の構築は難しい。

雑誌「農家女」、「打工妹」及び農村出身女性の自助機構である「打工妹之家」の農村出身女性の主体位置の構築への貢献を考察し、Jacka は以下の結論を下した。

メディアや機構は一方で、救済の福祉組織として農村出身女性の権益を守り、「自尊、自信、自立、自強」というスローガンを作り出し、技術訓練や活動を展開し、つまり、彼女たちの主体性を構築している。しかし、それらはもう一方で、彼女たちの声を「加工」し、彼女たちの名を借り、支配的な言説を作り出した。それらすべての救済や技術訓練は、暗黙のうちに「農村出身女性の質が低い」という仮説をもっており、彼女たちを都市文明

の洗礼をうけなければならない田舎者とみなし、彼女たちの主体性を認めていない。自分を農村出身女性を助ける啓蒙者だと思っている都市女性や、いわゆる「専門研究者」は、自分が意識しているかどうかに関係なく、農村出身者に対する「上」の優越感を持って、自分の立場を位置づけている。したがって、これらのメディアや機構の中心言説はやはりエリート言説の複製であり、農村出身女性の主体位置を構築していると同時に、彼女たちの主体性を解体しているといえる。

また、農村出身女性自身は都市経験を通して、他者化されていると痛感しているが、都市の支配的思想に感化され、自己を否定し、新しい自分でないアイデンティティを絶えず生産している。結局のところ、農村について抵抗感があり、どんなに辛くても、都市にとまりたがる。この精神的痛さこそが「啓蒙者」である都市者に見落とされている。彼らは焦点をアイデンティティ分裂の痛みではなく、農村出身者の都市環境の順応や彼たち自身の質の高めることにあて、「内なるオリエンタリズム」によって農村―都市の二項構図を強化することを通して、都市が農村出身者に加える普遍的抑圧を正当化し、その背後の制度の不合理性を隠している。

Jackaは語り手を変更し、エリートやメディアの支配的言説を分析しながら、農村出身女性自身の経験や言説に注目し、周辺―中心二項構図を脱構築しようと試み、この普遍的抑圧の裏の制度の不合理性を私たちの目の前に引き出し、従来の研究（黄 1995; 王ほか 2004; 余 2004）と異なる視座を与えている。さらに、彼女は公共圏の国家制度はいかに個人の私的生活の各方面に影響をあたえているのかを自分の研究を通して提起し、分析していることも評価できる。

## 2-2 フェミニズムレンズの中の農村出身女性

ジェンダー関係センターの研究員であるJackaは農村出身女性に目を向ける時、ジェンダーバイアスについても十分な関心を寄せている。ジェンダーバイアスへの視点が欠落するメディア言説の批判だけではなく、著者は農村における女性は家父長制の抑圧の下で生きることや都市における農村出身女性が男性と比べてより多くの社会的不利益を受けることについても論じている。

著者の調査が示すように、中国農村では、いまま未婚女性は農村に残り結婚することを選べば、土地請負経営権の問題や、父方居住婚・族外婚にともなう不自由さに直面する。また親の意志による「請負婚」を逃げるため都市に行くしかない女性も少なくない。したがって、女性の都市に行く動機には、家父長制権力の抑圧も重要な影響を与えると著者は

述べている。また、著者が述べるように、農村の伝統では、女性が大人になると、男性と結婚し、子供を産み、男性の家で一生を送るのが模範的女性であるとされ、村外に行ったら、これらの女性の貞操や道徳が疑われる。彼女たちが都市に行きたいといっても、そんなに簡単に行けるわけではない。更に、すべての障害を乗り越えて、ようやく都市に行った女性にとって、都市も避難港ではない。彼女たちは都市において家事労働者やセックスワーカーなどをしており、男性からの侵害を常に受けている。また、著者の発見では、都市で働いて、経済的独立を得たとしても農村出身女性は家の中の地位や名声を高められない人は多い。著者は対話者の経験を研究し、都市における農村出身女性をフェミニズムレンズの下において観察し、私たちが農村出身女性を理解するための多元的視角を与える。

しかし、私は著者のこの論点について批判的な考察をも加えたい。確かに、ジェンダーバイアスはいずれの階層でも存在しているのは事実であり、女性が多くの場合不利益をうける。ただ、ここで注意したいことは都市における農村出身女性問題を解く際、ジェンダーバイアスが都市－農村という階級身分の不平等と同じくらい影響力を持っていると考えてはいけないということである。

中国の現実において、農村部女性と男性との差及び農村女性と都市女性との差を比べて考えてみよう。いうまでもなく、後者は前者よりはるかに大きいと言える。著者も書いているように、ほかの都市出身女性は言うまでもなく、毎日自分と交流している「打工妹の家」の女性であっても、農村出身女性にとって「私たち」ではない「彼女たち」である。その差は非常に大きいといえよう。著者は本書の中に意識的あるいは無意識的に、家事労働者をしている農村出身女性が受ける性的暴力も含め、侮辱や暴力の要因を家父長制権力に収斂させている。しかし、現実のなかで、これらの女性のうける不利益も、農村出身男性労働者の工事現場で受ける搾取や暴力なども、本質から見れば、同じではないだろうか。中国学者の書いた農村出身男性労働者の生活実録（杜 2004; 蔡 2006; 李・李, 2007）を読めば、農村出身男性労働者の生活の辛さや労働の強度は女性と比べて、決して少なくないということがよく分かる。つまり、違うのはただ搾取方式だけである。更にいうと、ここで女性がよくメイドやセックスワーカーをするのは社会的性別によって決まったのではなく、生理的違いが原因だと考えられる。体力的に女性が建築現場の労働者として長期に労働することは難しい。したがって、端的に言えば、不利益を受けるのは彼らが女性あるいは男性だからではなく、「田舎者」だからである。中国都市における農村出身女性の問題を分析する時、ジェンダーバイアスの影響を強調しすぎると、一番の要因を曖昧化するおそれがあり、適当ではないと思われる。

### 2-3 反抗的な「孝行娘」と自己決定

本書前の先行研究では、都市に行く農村出身女性が「孝行娘」・「反抗的な娘」モデルとしてしばしばとりあげられる（pp.165-166 [以下、カッコ内のページ数は本書内でのページ数を示す]）。「孝行娘」モデルの支持者は若い農村女性の出稼ぎ労働が親による決定であり、自己決定ができず、家父長制の権力に従順な農村女性による、家庭経済利益の最大化を実現するための行動だと仮定している。「孝行娘」モデルの主張と相反し、「反抗的な娘」モデルの支持者は若い農村女性の出稼ぎ労働を家庭の需要ではなく、家父長制の反抗或いは自身発展の探求という自己決定として描いている。

しかし、本書の中で著者は自分の対話者の経験をもって分析し、ふるさとの伝統的価値観を拒絶しつつも家族の需要を念頭において、家族との信頼関係をつなごうとする「反抗的だが、孝行娘だ」という「反抗的な孝行娘」を私たちの視野に入れる（pp.167-180）。「反抗的な孝行娘」という言葉を著者が直接本書の中で述べているわけではないが、文脈に従って著者の主張である第三モデルとして、この言葉にまとめられる。著者は「孝行娘」と「反抗的な娘」という純粋な二元構図から出て、その間の複雑さを鋭い目で洞察した。

著者は「反抗的な孝行娘」の反抗的な出稼ぎ決定が家族需要などさまざまな影響をうけると認めているが、それは彼女たち自分の意志決定であると主張している。例えば、著者は「打工妹之家」の成員に対して、「都市に入って労働することになったのは誰による決定ですか」と質問し、彼女たちの答え（pp.166-167）を分析するとき、以下のように述べている。

若い未婚女性が労働のために故郷を離れることは普通、親の要求に従うことではないし、家庭経済に貢献したがることでもない。その反面、これらの女性たちは自分で決定と選択をするのであり、彼女たちの主な目的は自分の生活を改善し、「現代」の個体の自己実現を求めることである（p.203）。

しかし、ここで着目したいことがある。確かに、著者の対話者の中に「だから私は村を離れると決めた」（p.176）と言った女性がいる。著者は「私」という主語に注目しているが、ここで私は「決定」という述語について検討していきたい。「決定」や「選択」が成立する前提には、能動性と選択できる選択肢がなければならない。しかし、農村の現実環境に生きる彼女たちは能動性と選択肢を持たず、運命に流されて、どうしようもなく都市に行くのだといえる。

経済進展のなかで、国家は土地を商業化しつつ、国土資源部2005年度土地利用変更調

査によれば、2005年全国の耕地面積は前年より542.4万ムー（約5万4千ヘクタール）減少し、現段階で、毎年100万以上の農民が耕地を失っている<sup>(2)</sup>。生命線である土地を失った農民は生きるために、都市に行かなければならない。同時に、農村経済進展の遅さも農民を都市に押し出している。統計によれば、2004年まで、全国には2,610万の農村人口の年平均収入が688元（およそ1万円）未満であり、絶対貧困線以下だといえ、また4977万の農村人口の年平均収入は924元（およそ1万4千円）であり、相対貧困線以下人口である<sup>(3)</sup>。普通の農民家庭は、家庭に必要な医療費と子女の教育費を全然負担できない。1980年代の初期に中国都市－農村の居民の収入の差は1.9：1だったが、90年代の末になると、2.6：1となった。更に2004年に、この数値は3.2：1と拡大してきた<sup>(4)</sup>。それから、著者も論じたように、家父長制権力による請負婚現象や結婚した女性の様々な不自由さは今でも実際に存在している。

このような文脈で、「自己決定」を論じることは元来無意味だろう。「決定」というより、「生き残るための唯一の手段」といったほうがより適切である。まさに本書中の農村出身女性の言葉「今、娘を広東省あるいはシンセンにバイトに行かせるつもりなの。それはきつとつらいとわかってる。でも、しょうがなく、農村出身者にとって、この道しかないの、仕方がない。」(p.170)がそれを裏付けている。確かに、彼女たちにとって、これが自己決定ではなく、「仕方がない」という生きるための唯一の手段である。しかし、著者の用意したアンケートでは、このような選択肢がない。したがって、「ふるさとをはなれて、都市に入って労働するのは誰による決定ですか」と聞かれるとき、「自分で決めた」と答えるしかなかったのだろう。都市－農村の二項対立という中国の現実を考えずに、単純に彼女たちの答えから自己決定が存在していると判断するのは議論の余地がまだあると思われる。

## おわりに

ルイス・ハーツが書いた B. I. シュウォルツの『中国の近代化と知識人——嚴復<sup>(5)</sup>と西洋』という本の序文のなかに以下の言葉が書かれている。

<sup>(2)</sup> 王 (2006. 3. 9)

<sup>(3)</sup> 孫 (2006. 3. 16)

<sup>(4)</sup> 柳 (2006. 6; 72)

<sup>(5)</sup> 嚴復 (1853年12月10日～1921年10月27日) は、中国清末から民国初めにかけて活躍した啓蒙思想家・翻訳家。



ある国民の思想には、明確な形で生活の表面に現れてこないために、その国民からは見逃されてしまうような側面がある。ところが、外国人には、その国民の文化が自分の文化とは対照的であるために、その隠れた思想の側面をはっきりと認識することが可能になるばあいがあるものである。外国人批評者の本領は、自分が研究対象とする国民について、その生活の内面に伏在しているような思想の諸側面を明示するところにあるのだといえよう (Schwartz 1964=1978)

Jacka は外国人である他者の視線で中国都市における農村出身女性を見て、10年以上のフィールドワークを経て、経験者自身の語りやライフストーリーを分析し、数多くの研究発見ができた。「打工妹之家」の未婚若い女性への観察だけではなく、著者は海淀区の既婚女性の経験にも注目し、研究結果を普遍化した。オーストラリア人である著者の研究成果である本書は他者の視線で中国の問題を把握する時の限界ももつが、質的アプローチに基づく検討が少ない中国研究において、重要な意味を持つ文献だといえる。

本書の中の主なフィールドワークは2001年に行われた。今日の中国は日夜激しく目まぐるしい変化を遂げて、2002年の第16回全国人民代表大会において「三農問題（農業、農村、農民）」が政治的課題として取り上げられて以来、都市の農村出身者も数多くの状況変化を経験してきた。したがって、本書の論述は過渡的段階の一時点の状況であり、変化していくものだと理解しなければならない。

今後の課題として、この都市－農村間の制度やジェンダー秩序の再編成について継続的に研究する必要もあるが、著者の本書で用いるポストモダン・フェミニズム理論の適用性と限界を再考する必要もあるだろう。

## 参考文献

- Arianne, M. Gaetano and Tamara Jack (eds.), 2004, *On the Move: Women in Rural-to-Urban Migration in Contemporary China*. New York: Columbia University Press.
- Bakken, Børge, 2000, *The Exemplary Society: Human Improvement Social Control, and the Dangers of Modernity in China*. Oxford: Oxford University Press.
- Jack Tamara, 1997, *Women's Work in Rural China: Change and Continuity in an Era of Reform*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schwartz, B. 1964, *In Search of Wealth and Power: Yen Fu and the West*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press. (= 平野健一訳, 1978, 『中国の近代化と知識人——嚴復と西洋』東京大学出版会.)
- 高橋博・中村公省・合田暁夫, 2004.7.10, 「2010年の中国を読むキーワード」『21世紀中国総研究特刊』.
- 黄晨熹, 1995, 「民工遷流对農村人口素質的影響と対策」『社会』.
- 王洪春・阮宜勝, 2004, 『中国民工潮の経済学的分析』中国商務印書館.
- 余紅・丁骋骋, 2004, 『中国農民工考察』崑崙出版社.
- 蔡昉・白南生, 2006, 『中国転軌時期労働力流動』社会科学文献出版社.
- 杜麗容, 2004, 『中国民工生存報告』中国時代経済出版社.
- 蔡建文, 2006, 『中国農民工生存記実』当代中国出版社.

- 李濤・李真, 2007, 『農民工——流動在辺縁』当代中国出版社.  
王姝, 2006.3.9., 「失地農民年均達百餘萬」『新京報』.  
孫立平, 2006.3.16., 「以富民政策擴大內需」『南方週末』.  
柳文, 2006.6., 「啓動農村消費必須破解三大障礙」『中国改革』.

(ほく あへい・修士課程)